



## ■ 第2代部長

また書きます。まだ書きます。

昨年の冊子からスタートした“部長としてのあとがき”、社歴部長論。正直なところ、再びこのコーナーを書くことになるとは思っていませんでした。

それもそのはず。当初は年度末、すなわち今年の3月までで辞めるつもりでいたのに、オープンキャンパスの成功に闘志を燃やしたり、急遽被災地への合宿が実現できることになったりで、7月、8月とのびのびになり、今に至っているのですから（笑）

それでも、まだ部長。今月に入りようやく引き継ぎの体制を整え、とうとう高学祭準備も任せつきになった今、自由に、そしてどこか好き勝手に、思うことを書いていこうと思います。

## “読んでもらう” 部長論

そう、「好き勝手に」書きたい。でも何を書くのか——原稿の締め切りが刻一刻と迫るなか、手が動かないのです。どうしても昨年やら前回やらの文章、いわゆる「前例」を意識し、踏襲しようとしてしまう。これがすでに望ましくないことなんですよね。全部変えていく……くらいの勢いでやらないと。「新しいことをあきらめない」「社歴研をぶっ壊せ！」と書いた去年の自分は、果たしてどこにいったのでしょうか（笑）

そこで、思ったこと。前回のこのコーナーでは、内輪ネタが多過ぎました。始めから終わりまで部内の話。いや、それが間違いだったとは思っていません。むしろ部長として、後輩たちに伝えたいことを思うままに書きました。もはや直接語りかけるような感覚でした（笑）

「部員仲間に読ませる」、これも部長論の一面。しかし、この冊子を手にとる多くの方々とは同好会との関わりはないでしょう。ですから、今年はこちらでもう一つ、「全く関わりのない方々に読んでもらう」という面を加えることで前例を壊し、自ら生み出したコーナーをまた一步、成長させていきたいと思っています。

## 私たちは知らなさすぎる

2012年。当初の設定だと、かの有名な青い猫型ロボットは今月の3日生まれだそうです。タケコプターもどこでもドアもないけれど、ちょっとビックリ。昔の人々にとっての“未来”が“今”に——そんな9月も終わりの方になってくると、気になってくるのは上半期のニュース。思えば、すでに1月1日から大きな動きがありました。1995年3月、都内の地下鉄にサリンを撒くという空前の大規模テロ事件を引き起こした「オウム真理教」の元信者で、17年間に渡り逃亡を続けていた特別手配犯の一人、平田信容疑者の出頭です。



この出頭自体が大変な不意打ちでビッグニュースだったわけですが、さらなる急展開を見せたのは6月。残る手配犯の菊地直子・高橋克也両容疑者の身柄が確保され、一連の事件に関わった容疑者は全員逮捕されることになりました。

ご覧になった方がどれほどいらっしゃるかわかりませんが、実は菊地容疑者逮捕の前、すなわち5月末ごろに、NHKスペシャルの「未解決事件」シリーズにおいて、オウム真理教をテーマにした番組が放送されています。オウムはどの時点から暴走し、破滅的な結果をもたらすことになってしまったのかを、元古参信者の証言に基づきドラマで再現したものです。

その番組を見ていて、思ったこと——

それは、「私たちの世代はこの事件について知らなさすぎる」ということでした。

## 知ろうと「努力」しました

つまる所、実感がない。そりゃもちろん、「地下鉄サリン事件」を知らない人はいないでしょう。歴史の教科書の年表にすら登場する。でも、年表というのは書いてあってせいぜい一行です。つまり、単語としてしか出てこない。「地下鉄サリン事件」という固有名詞は知っていても、その中身についてはよく知らないのです。

実際のところ、こういうことはよくあります。「ジェネレーションギャップ」という言い方がよく知られていますが、極端な話、そういうことなのでしょう。我が社会歴史研究同好会で言えば、部員は高2以下の学年がほとんどですから、オウム真理教がはびこり、地下鉄サリン事件が発生した1995年と同じ年か、それ以降に生まれた者ばかりということ。

これでは知らないのも当然ですが、やはり日本中に衝撃を与えた事件の詳細を最低限は知っておくべきと考え、同好会では高橋克也逮捕直前の6月13日に、先ほど取り上げたNHKスペシャルの上映を通して、オウム事件について考える特別活動を実施しました。

## 記憶の風化を防ぐには

同じことは、東日本大震災についても言えることです。1年半もの時間が経ちながら、未だに震災関連の報道を目にしない日はありません。まさしく現在進行形……震災による余波は今も続いています。それだけ、私たち日本人にとって大きな出来事だったということでしょう。

しかし、いつかは実感を伴わない世代に移り、年表に登場する「一行の単語」としてしか、認識されなくなるかもしれない。阪神大震災で高速道路が倒れた写真のように、黒い波に飲み込まれていく沿岸地域の写真が教科書に載って、それだけが震災の『イメージ』になるかもしれない。



いや、「その程度」ならまだ良いのです。大震災の痛みを忘れ、津波や原発事故の恐ろしさを忘れた世代が、「大津波警報」の発令を知っても避難しなかったり、原発のメリットばかりに目がくらんで再び「原発推進」の方向に傾いていったりすること……これが一番怖い。

だからこの後の世代は、すなわち東日本大震災と同じ年あるいはそれ以降に生まれた人たちは、この歴史的な大災害を知ろうとする「努力」をしなければならないと思います。こうした過去の出来事（まだ過去というには早すぎますが……）は、今にもつながるものなのです。

オウム真理教の件で言えば、後継団体が最近も活発に信者の勧誘を続けていて、その対象は「地下鉄サリン事件を知らない世代」の若者だと言います。逆に事件を知っていれば、その悲惨な結末を知ってさえいれば、冷静な判断ができる。規模は違えど、「記憶を風化させない」ということの『意義』で見ると、全く同じことなのではないでしょうか。

## 今を生きるからこそできること

しかし、地下鉄サリン事件は別として、この東日本大震災に関しては、私たちは今まさにリアルタイムで生きている世代です。特に、物事について色々と考えるだけの時間的余裕が多くある学生時代に経験した世代。今を生きているからこそやらなければいけないことがたくさんあると思う。「知ろうと『努力』」する世代の人たちに、当時を生きた人間として、記憶を受け継いでいく使命。今回の同好会出展のテーマでもあります。

しかしそのためには、被災地から遠く離れた地で傍観者かのようにテレビを見ているだけでは浅いか過ぎる。被災地の現状をこの目で直接見て、確かめて、より一層の現実味をもって捉えておくことがなによりも重要では——そう考え、夏期合宿での視察研修を企画しました。

詳しいことは会場上映の映像や冊子の合宿レポートをご覧くださいとして、個々の部員が抱いた「震災から1年半の被災地」に対する印象を展示に反映させることができたという点では、非常に意義のある合宿だったのではないかと思います。「今しかできない」ことですし。

## やるべきことをする

知らない世代はもちろんですが、知っている世代であってもさらなる努力が必要なのです。確かに私たちはリアルタイムで「震災当時」を生きていますが、それだけでは後に続かない。しかも、関東地方の被害は東北に比べれば小さく、「被災地に生きている」とは言えません。その分、実際に被災された方のお話などを聞き、深めていくことが重要なのでしょう。

オウム真理教の事件と対比して書いてきたように、これは全ての事柄について言えること。一人の人間が経験できることは、生まれた時代や生まれた場所に左右され、限りがあります。だからこそ、今を生きる全ての人々に、いつまでも「震災について知る」「考える」という努力を忘れずにいてほしい。そして私たち社会歴史研究同好会も常にその姿勢を持ち続け、復興の過程を見つめながら、「できることをする」「やるべきことをする」、覚悟です。

